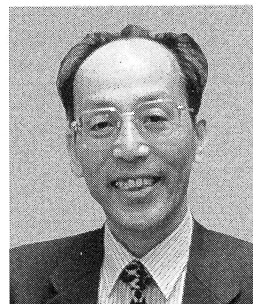


# 10周年記念号の刊行にあたり

## On the Issue of the 10th Anniversary

### Special Edition

社会情報学部長 伊藤朋恭  
Dean Tomoyasu Ito



早いもので社会情報学部は昨年度末をもって満10歳を迎えることができました。これも一重に設置準備の段階を含めて今日に至るまでの、ご関係各位のご理解・ご協力の賜物であり、ここに厚く御礼申し上げます。お蔭様で在校生1,400名の先輩として社会に巣立った卒業生数も2,500名に達し、21世紀に生きる女性としてそれぞれの役割に応じて頑張っています。特にコンピュータあるいは情報処理関連職種への就業者も多く、就職率の高いことと合わせて、本学部本来の特色が生かされていると言えましょう。

思えば、全国で2番目の社会情報学部として発足した10年前は、社会情報学という用語自身がまだ耳新しく、40数名の専任教員の多くが、それまでの自分の専門領域とのつながりを視野に入れながら、この新しい領域の方向性を模索せざるを得ませんでした。その後、全国にいくつかの類似の学部あるいは学科が誕生しましたが、本学部の設置に大きな役割を果たされた磯田浩・初代学部長と、その後続く金子ハルオ・2代目学部長、野崎昭弘・3代目学部長の並々ならぬご尽力のおかげで、社会科学と自然科学の融合した特色ある社会情報学部として成長してきました。それを反映して本学部は、平成8年の第1回日本社会情報学会大会の開催校になるなど、日本社会情報学会の設立に寄与するとともに、今年度からは同学会事務局を本学部に設けるなど、学会の中心的役割を果たすまでに至っています。

この間学部内においては、平成8年4月の大学院社会情報研究科（修士）の設置や平成11年4月の臨時的定員から恒常的入学定員への切替えなどがあり、学生の勉学意欲を満たす態勢を整えてきました。同時に多摩キャンパス全体としては、平成11年に短期大学部の廃止にともなう人間関係学部および比較文化学部の新設があり、社会情報学部としてもより強く切磋琢磨の必要性を求められる状況になっています。

本学部の研究活動の一端を示す社会情報学研究・紀要も、本学部の歩みに合わせて、昨年度第10号を刊行しました。今年度の紀要では、この満10年の経過を記念して、例年より多くの論文を掲載するとともに、冒頭部分で、理事長、学長、常任理事、および歴代学部長の方々に、それぞれのお立場で執筆していただいたご挨拶文を掲載しました。これを励みとして、今後も本学部の教育研究活動の一層の発展に努める所存でありますので、引き続き皆様方のご支援を宜しくお願い申し上げます。